

## ながら族のすすめ

久留米大学医療センター 循環器内科 甲斐久史

私は、恥ずかしながら“超”がつく“ながら族”である。中学生の頃、深夜隠れてラジオを聞きながらお勉強というありがちなきっかけで私の“ながら族”人生が始まった。以来40有余年、日々の研鑽の結果、いまや、PC仕事も文献あさりも、その日の気分にあわせて節操なく選んだバッハからシェーンベルクまでクラシックをかなりの音量で響かせ、コーヒーをすすり、PCの画面の片隅ではホークス戦の一球速報をチラ見しつつ、小腹がすいたら酢昆布を嚼むというのがルーティーンとなっている。自宅であれば、コーヒーがアルコールに、一球速報がパ・リーグTVの動画に替わるのは言うまでもない。もちろん一度に何人もが同時にいうことを理解できた聖徳太子のようなどとは一寸たりとも思っていない。その証拠に“歌”は、特に日本語や英語だと、気が散って“ながら”仕事はかどらない。ドイツ語やイタリア語なら“言語”としてではなく“音”として頭に入って来るから辛うじて大丈夫(?)なのである。

こんなことでまともな仕事ができるのか?“ながら”をやめたら仕事が2倍も3倍にできたらろうというのが十中八九、まともなご意見だろう。確かに何度も“ながら族”から足を洗おうとした。しかし5分ともたない。すぐにそわそわし始めて頭の中がまとまらない。1頁も文献が読めず、1行も論文が書けない。ともすると睡魔に負けてしまう、、、大変情けない状態に陥るのである。勝手に「常に一定の聴覚刺激が加わり、適度に視線を動かすことがないと活性化状態(覚醒状態?)を維持することができない脳の作りなのだろう」「タバコを吸うよりましだ」などと、都合の良い言い訳を作り、信じている。

実は読書も濫読タイプで、しばしば複数を並行して読む。現に今、ベッドで眠りにつくまでの一時は竹内結子を思い浮かべながら「ストロベリーナイト/姫川玲子」シリーズの最新作「硝子の太陽 Rouge」「硝子の太陽 Noir」で、車中や機上では中学時代以来の趣味である“系図書き”にとって目から鱗が落ちる「女系図でみる驚きの日本史(新潮新書)」で至福の時を楽しんでいる。これは“ながら”ではないかもしれないが節操がないのは確かである。

とはいえ、私はこれからも節操なく“ながら人生”を続けていくつもりである。限りある人生、与えられた時間が同じなら同時に並行して多くのことに使った方がお得!だからである。